

【分科会 21】東日本大震災 ～これまでとこれから～

出演者: 駿河孝史(岩手県盛岡市:岩手県清和病院/WRAP研究会いわて)

渡部裕一(宮城県仙台市:原クリニック/みやぎ心のケアセンター)

西みよ子(福島県南相馬市:NPO法人あさがお)

座長: 後藤雅博(新潟県新潟市:南浜病院)

35 人の参加者と一緒に出演者のお話を聞いて、その後、参加者からの質問・感想に出演者が答える形で分科会が進みました。

初めに駿河さんからの報告。内陸部から沿岸部の町に出向いて、「宮古こころの元気サロン」の活動を、ピアの仲間たちと交代で支援し続けている「WRAP研究会いわて」の活動を通しての駿河さんの想いをうかがいました。継続的な支援が必要であることと、その工夫、そして「僕たちは被災者でもありませんし、被災者支援をしているつもりもありません。しかし“元気の分かち合い”の交流は、きっと意味のあることなんだと、私たちも思っています」という言葉が印象的でした。

次に渡部さんの報告。「みやぎ心のケアセンター」が立ち上がるまでの経緯と、全国から支援に来られる“支援者”のコーディネートのお話を伺いました。「支援者の支援が大変」と大きな課題を投げかけられたように感じました。

続いて西さんの報告。福島第 1 原子力発電所の爆発以降、グループホームの利用者さんと、単身生活をされている就労継続支援 B 型事業所の利用者さん達と山形に避難し、安心して生活できる場を探し求め、そして、南相馬に帰る決断をされる過程を、DVD で報告してくださいました。これまで普通にしてきたキノコ狩りや、柿をもいで子どもたちに送る楽しみを奪われ、放射能の恐怖のある土地に戻ることにした想いをうかがいました。

その後、会場からの質問・感想が 7 件。「支援者の支援にならないようにするには?」「これから起きるかもしれない地震。今、自分たちにできること、心構え等あれば教えてください」「何を一番大切にして生活されていますか?」などの質問が出され、後藤さんのコーディネートのもと分科会が進行しました。

「支援者として、結局何もできなかったという不全感を持っています。“お互いさま”という駿河さんたちの活動をきいて、ますます、どうしたものかと考えてしまいました。自分にできることは何か、あらためて考えていこうと思います」と率直な感想もいただきました。

《内山澄子(もくせい舎/NPO法人全国精神障害者地域生活支援協議会)》